

---

講座

---

## 「児童文学入門」 ——英米児童文学史の概観——

笹田 裕子

本稿では、1860年代から21世紀に至るまでの約150年間に焦点を当て、時代背景や社会的・文化的事項にも言及しつつ、代表的な作品について時系列で述べ、英米児童文学史を概観する。

### はじめに

本稿では、1860年代から21世紀に至るまで、すなわち、『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865)から7冊の「ハリーポッター」シリーズ(*Harry Potter series*, 1997-2007)が出版された時代に焦点を当て、英米児童文学史を概観する。約150年間におよぶ英語圏の代表的な児童文学作品について、時代背景や社会的・文化的事項にも言及しながら、ジャンルを意識しつつ時系列で述べる。

### 児童文学の最初期——教訓から楽しみへ

19世紀以前の英米児童文学史上重要な事項や作品について、「最初期」としてその概要を述べる。

イギリスで本が出版されるようになるのは、ウィリアム・カクストン(William Caxton)が活版印刷の技術を導入した15世紀後半からである。書物の出現以前にも伝承文学(口承文芸)は存在しており、子どもの文化に多大な影響を与えてきたが、子どものための本の出版が始まるのは17世紀に入ってからであり、さらに著しい変化を遂げるのは17世紀末から18世紀にかけての時代である。ピューリタニズムの影響下、当時の子どもの本といえば宗教や行儀作法に関する本あるいは教科書であり、それ以外の本も、サラ・トリマー(Sarah Trimmer, 1741-1810)の『こまどり物語』(*The History of the Robins; 1786年初版時のタイトル Fabulous Histories: designed for the Instruction of Children, respecting the Treatment of Animals* から後に改題される)やシャーウッド夫人(Mrs Sherwood, 1775-1851)の『フェアチャイルド物語』(*The History of the Fairchild Family*, 1818, 42, 47)などのような教訓色が強い作品に限られた。

子ども向けに書かれたわけではない作品が、ピューリタニズムが排除していた空想性を有していたことから多くの子ども読者を獲得したのが、この時代である。ジョン・バニヤン(John Bunyan, 1628-88)の『天路歷程』(*The Pilgrim's Progress*, 1678)、ダニエル・デフォー(Daniel Defoe, 1660-1731)の『ロビンソン・クルーソー』(*The Life and Strange Surprising Adventures of*

*Robinson Crusoe of York*, 1719)、ジョナサン・スウィフト(Jonathan Swift, 1667-1745)の『ガリヴァー旅行記』(*Gulliver's Travels*, 1726)は、いずれも別世界への旅や冒険が題材であることから、子ども達を強く惹きつけた。

さらに、17 世紀から 18 世紀にかけて行商人チャップマン(chapman)が売り歩いたチャップブック(chapbook)も、廉価本である上に木版画の挿絵付きで文章も平易であったことから、同様の役割を果たす。但し、チャップブックはやがて、絵が付いた表紙にしたり題材に昔話を増やしたりというように、子どもを意識した配慮が加えられるようになる。『ロビンソン・クルーソー』や『ガリヴァー』の焼き直しや伝承童謡の他、「巨人殺しのジャック」や「シンデレラ」や「赤ずきん」などが人気が高かった。子どもがチャップブックに夢中になった背景には、本が高価で限られた子どもしか手にとることができなかったという事情もある。

子どもの本の歴史において、子どもの教育に必要なのは「楽しみと喜び」だと指摘したジョン・ロック(John Locke, 1632-1704)の『教育論』(*Some Thoughts Concerning Education*, 1693)が果たした役割は大きい。ジョン・ニューベリー(John Newbery, 1713-67)はロックの見解に賛同し、『小さなかわいいポケットブック』(*A Little Pretty Pocket-Book*, 1744)を出版して大成功を収める。これを契機に、「楽しい」子どもの本が出版されるようになる。特に、ジョン・ハリス(John Harris, 1820-84)の『ちょうちょの舞踏会とバッタの宴会』(*The Butterfly's Ball and the Grasshopper's Feast*, 1807)は、有名なマザーグースを扱った『ハバードおばあさんと犬』(*The Comic Adventures of Old Mother Hubbard and Her Dog*, 1805)と併せて、教訓色が皆無であったことから人気を博した絵本である。18 世紀半ば以降の中産階級の台頭と、家庭への意識や子どもの教育への関心が高まった時代背景も、子どもの本の普及に大きく寄与した。

19 世紀に入ると、ロマン主義運動により、フェアリーテイルズが見直され、『グリム童話集』の英訳版(*German Popular Stories*, 1823, 26)が出版された影響からファンタジーへの関心が高まり、子どもの教育においても、楽しみながら学ぶことに加え、想像力を育むことも必要だという見解が生まれた。

自身が挿絵も手がけたエドワード・リア(Edward Lear, 1812-88)の『ノンセンスの絵本』(*A Book of Nonsense*)は、子ども読者を楽しませるためのノンセンスな五行戯詩(limericks)が集められた本である。この作品が出版された 1846 年は、『アンデルセン童話集』の英訳版(*Wonderful Stories for Children*)初版が出版された年でもある。かくして、ノンセンスと想像力という 2 つの要素が、次の時代に誕生する児童文学作品へとつながっていくのである。

## 「黄金時代」と「金めつき時代」

1860 年代のイギリスでは、1865 年に出版されたルイス・キャロル(Lewis Carroll, 1832-98)の『不思議の国のアリス』をはじめとしたファンタジーが隆盛を極めた。チャールズ・キングズリー(Charles Kingsley, 1819-75)の『水の子』(*The Water-Babies: A Fairy Tale for a Land-Baby*, 1863)とジョージ・マクドナルド(George MacDonald, 1824-1905)の『北風のうしろの国』(*At the Back of the North Wind*, 1868, 69)は、『アリス』と共に「ヴィクトリア朝三大ファンタジー」と呼ばれる作品である。

数学者キャロルが生み出した『アリス』は、その独創性のみならず、言葉遊びやユーモアがふんだんに盛り込まれていること、また、教訓性を完全に脱却していることがそれまでの児童文学作品とは大きく異なっていた。

当時大英帝国として世界に権勢をふるっていたイギリスでは、児童文学の「黄金時代」を迎える。さらに、『アリス』の出版は「ファンタジー第一黄金時代」の始まりだとも言われている。「黄金時代」という名称は、エリザベス1世統治下の16世紀半ばから17世紀にかけてのイギリスの繁栄を指す呼称とも重なるが、ケネス・グレアム(Kenneth Grahame, 1859-1932)の短編集にも『黄金時代』(*The Golden Age*, 1895)というタイトルがある。グレアムは、英国紳士を擬人化された動物たちで描く「動物ファンタジー」の傑作『たのしい川べ』(*The Wind in the Willows*, 1908)の作者として知られている。

ファンタジーのみならず、印刷技術の発達により絵本も目覚ましい進歩を遂げる。印刷業者エドマンド・エヴァンズ(Edmund Evans, 1826-1905)の功績である木口木版による多彩色刷が、絵と文を同じページに印刷することを可能とし、絵本を色彩豊かなものとした。イギリスでヴィクトリア朝三大絵本作家であるケイト・グリーナウェイ(Kate Greenaway, 1846-1901)、ランドルフ・コールドコット(Randolph Caldecott, 1846-86)、ウォルター・クレイン(Walter Crane, 1845-1915)の作品が誕生したのも、この時代である。

同時代のアメリカは、「金めつき時代」(the Gilded Age)と呼ばれる時代をむかえた。この呼称は、約60万人以上もの死者を出した南北戦争(1861-5)を経た、「ボロから富へ」という当時の利潤追求を反映したものであり、マーク・トウェイン(Mark Twain, 1835-1910)の共著『金めつき時代』(*The Gilded Age*, 1873)の書名でもある。これに先行する時代のアメリカの児童文学にはイギリスの影響が大きかったが、「金めつき時代」には、トウェインの『トム・ソーヤーの冒険』(*The Adventure of Tom Sawyer*, 1876)やルイザ・メイ・オールcott(Louisa May Alcott, 1832-88)の『若草物語』(*Little Women*, 1868)など、それぞれ「冒険物語」および「家庭物語」というジャンルを代表的する作品が出版された。トム・ソーヤーは、イギリスのイーディス・ネズビット(Edith Nesbit, 1858-1924)の『宝さがしの子ども達』(*A Story of Treasure Seekers*, 1899)の語り手である少年主人公オズワルド・バスタブルと同様、抜け目のなさを持ちながらも愛すべき子どもとして登場した。ロマン主義の「美しい子ども」に通ずる、腕白さの奨励である。

さらに、童謡や昔話に挿絵を付けたものが主流であった絵本に、作者が絵も文も手がける「創作絵本」が登場するようになった。イギリスのビアトリクス・ポター(1866-1943)作『ピーターラビットのおはなし』(*The Tale of Peter Rabbit*, 1902)は、優れた「動物ファンタジー」であると同時に、創作絵本の最初期を代表する名作である。

## エヴリデイマジックと孤児物語

20世紀初頭のイギリスは、大英帝国としての繁栄の後の翳りが見え始めた時代であった。この時代には、子どもの視点に立つ作家として知られるネズビットが、『砂の妖精』(*Five Children and It*, 1902)で、子ども達が遊ぶごく日常的な空間に、突然不思議な姿をした願いをかなえる力をもつ妖

精サミアドを出現させる。これは、「エヴリデイマジック」と呼ばれるファンタジーのジャンルにおける先駆的な作品である。

また、子ども時代へのノスタルジーを追求したのが、同じくイギリスの戯曲家ジェイムズ・バリ (James Matthew Barrie, 1860-1937)であった。1904年初演の戯曲 *Peter Pan, or The Boy Who Wouldn't Grow Up* を元にしたファンタジー作品『ピーターパン』(*Peter and Wendy*, 1911)は永遠の少年ピーターとダーリング家の子ども達の交流を描く。ピーターがウェンディをはじめとする子ども達を誘うネヴァーランドは、決して大人にならないピーターのための別世界である。

19世紀後半から20世紀初頭のアメリカでは、1890年代から1910年代にかけての図書館活動の活性化により、児童文学は全盛期を迎え数々の名作が生まれた。アメリカ初の本格ファンタジーであるライマン・フランク・ボーム (Lyman Frank Baum, 1856-1919)の『オズの魔法使い』(*The Wonderful Wizard of Oz*, 1900)が出版されたのも、この時代である。竜巻という実在の自然現象で愛犬トトと共に別世界へ飛ばされた少女ドロシーが、かかし、ブリキのきこり、臆病なライオンと力を合わせて、カンザスにある「わが家」へ帰る術を探して旅に出るこの物語は、現実と密接な関わりをもち主人公の気質からも、「アメリカ的」だと言われる。

『オズ』の主人公も孤児だが、この時代のアメリカ児童文学には、明るい孤児を描くものが多く、その背景には先の南北戦争や移民の影響による孤児の人口増加などがある。例えば、ジーン・ウェブスター (Jean Webster, 1876-1916)の『あしながおじさん』(*Daddy-Long-Legs*, 1912)、エレナ・ポーター (Eleanor Porter, 1868-1920)の『少女ポリアンナ』(*Pollyanna*, 1913)、フランシス・ホジソン・バーネット (Frances Hodgson Burnett, 1849-1924)の『秘密の花園』(*The Secret Garden*, 1911)も孤児の少女が主人公である。『秘密の花園』では、インドで生まれ育ったメアリ・レノックスがコレラで両親を亡くした後、イギリスの叔父に引き取られ、屋敷の広大な庭園内の閉ざされた庭園を甦らせることで、家中に癒しをもたらす。バーネットは、他にも『小公子』(*Little Lord Fauntleroy*, 1886)や『小公女』(*A Little Princess*, 1905)などの代表作において、アメリカ庶民とイギリス貴族の間で架け橋の役割を果たす少年主人公や、突然の父親の死で霊落した後も毅然とし誇りを失わないインド育ちの少女主人公などを描いた。

20世紀初頭のカナダで生まれたL・M・モンゴメリ (Lucy Maud Montgomery, 1874-1942)の『赤毛のアン』(*Anne of Green Gables*, 1908)もまた、孤児物語の名作である。男の子を引き取る予定だった年配の兄妹の元に、豊かな想像力をもつ明朗な孤児の少女アンがやって来る。マリラとマシューのカスバート兄妹のみならずアヴォンリーの人々をも魅了するアンには、当時の女性としてはかたやぶりな一面も見られる。同級生ギルバート・ブライスの頭に石板を叩きつけて割るという、率直な憤りを見せる場面は話題となった。

## 戦間期および戦後の児童文学——大戦を経て

第1次世界大戦(1914-8)と第2次世界大戦(1939-45)の狭間に当たる「戦間期」には、主人公の名前の普及率が高い作品が登場した。『ドリトル先生アフリカゆき』(*The Story of Doctor Dolittle*, 1920)は、作者の戦争体験なしには書かれなかった物語である。イギリス生まれのヒュー・ロフティン

(Hugh Lofting, 1886-1947)は、負傷した軍馬が射殺されるのを目撃し、動物の言葉を解する医者「ドリトル先生」を創案した。『ドリトル先生』はその人気からシリーズ化され、第2作の『ドリトル先生航海記』(*The Voyage of Doctor Dolittle*, 1922)が最初のニューベリー賞(1922年に制定されたアメリカの児童文学賞)を受賞した。

イギリスの喜劇作家だったA・A・ミルン(Alan Alexander Milne, 1882-1956)は、息子の誕生を契機に4冊の児童文学作品を手がけるが、『クマのプーさん』(*Winnie-the-Pooh*, 1926)とその続編『プー横丁にたった家』(*The House at Pooh Corner*, 1928)は、息子が母親や乳母と縫いぐるみで遊ぶ様から作者が着想を得て生まれた。テディベアのプーをはじめ、「百ちよ森」(‘100 aker wood’の石井桃子訳)という遊戯の世界で〈命〉を得た縫いぐるみ動物達は、その自由な動きから、この作品を「おもちゃのファンタジー」と「動物ファンタジー」の狭間に位置づけている。就学前の幼い子どもが安心して遊ぶことができる限られた空間としての森は、ミルンが描き出した「永遠の子ども時代」の象徴であると言われている。

後に心理学者ウィニコット(D. W. Winnicott)は、『プー』に触発され、母親から離れ初めて外界と接する前の幼児にとって重要な役割を果たす「過渡的対象」(transitional objects)を提唱するが、イギリスのマージェリー・ウィリアムズ・ビアンコ(Margery Williams Bianco, 1881-1944)のファンタジー絵本『ビロウドうさぎ』(*The Velveteen Rabbit or How Toys Become Real*, 1922)のウサギの縫いぐるみもまた、「過渡的対象」とみなすことができる玩具である。

「エヴリディマジックの後継者」と言われるのが、イギリスの作家P・L・トラヴァース(Pamela Lyndon Travers, 1899-1996)の『風にのってきたメアリー・ポピンズ』(*Mary Poppins*, 1934)である。ある日バンクス家を訪れる不思議な乳母は、日常生活でふいに出遭う魔法に他ならない。また、出版以降「メアリー・ポピンズ」が優れた乳母の代名詞として使われるようになったほど、知名度の高い作品である。

J・R・R・トールキン(John Ronald Reuel Tolkien, 1892-1973)の『ホビットの冒険』(*The Hobbit, or There and Back Again*, 1937)は、小人のホビット族のビルボ・バギンズが、ある日突然、ドワーフ族(ホビット族より少し大きな小人)の先祖が竜に奪われた宝を取り戻すための冒険の旅に出ることになる物語である。トールキンが実子達に聞かせたベッドタイムストーリーから始まった『ホビット』は、やがて20世紀を代表するファンタジーと称されることになる『指輪物語』(*The Lord of the Rings*, 1954-5)の序となった作品である。

第2次世界大戦後は、それまでの児童文学では描かれなかった主題を扱かう作品が生まれる。イギリスのルーマー・ゴッデン(Rumer Godden, 1907-98)作『人形の家』(*The Dolls' House*, 1947)は、エミリとシャーロットという2人の女の子の人形であるプラントガネット一家が主人公である。人間と話すことができない人形達は、「願う」ことでしか子ども達へ思いを伝えることができないが、通じなければ翻弄されるしかない。一旦は手に入った素晴らしい「人形の家」が奪われ、一家の中の1体の人形が自らを犠牲にすることで、ようやく人形一家に平和が戻るというこの作品は、人形を題材に「殺人」を描いた初めての子どもの本である。

メアリー・ノートン(Mary Norton, 1903-92)の『床下の小人たち』(*The Borrowers*, 1952)には、人間が住む家屋の床下に隠れ棲む小人のクロック一家が登場する。何も特殊な能力を持たない小人達

は、人間に見つからないように気をつけながら、人間の物を「借りる」ことで生活している。主人公の女の子アリエッティが人間の男の子と交流をもったことから、一家の存在を人間達に知られてしまう。安住の地を追われ、さまようことになる小人達には、戦時中に苦難の日々を生きた作者自身の経験が反映されている。

アメリカでは、1929年の株価大暴落を契機に、ルーズヴェルト大統領により掲げられた「ニュー・ディール政策」が達成される1939年の第二次世界大戦勃発直前までの間、長年にわたる不況の時代「大恐慌」が始まる。ローラ・インガルス・ワイルダー(Laura Ingalls Wilder, 1867-1957)による「大草原の小さな家」シリーズ(1932-43)の最初の作品『大きな森の小さな家』(*Little House in the Big Woods*, 1932)が出版されたのは、このような時代であった。ワイルダー自身の子ども時代をふり取り、古きよきアメリカを描いたこのシリーズは、励ましを得た多くの読者から愛され、1954年にはその名前を付けた文学賞ローラ・インガルス・ワイルダー賞が誕生し、ワイルダー自身が最初の受賞者となった。

また、アメリカ絵本の最初の黄金時代は、戦間期の1930年代に幕を開ける。この時代に先駆けて登場したワンダ・ガグ(Wanda Gág, 1893-1946)の『100 まんびきのネコ』(*Millions of Cats*, 1928)は、アメリカ絵本の古典と言われる作品である。同時代の絵本には、好奇心の強い子犬が主人公の、マージョリー・フラック(Marjorie Flack, 1897-1958)による『アンガスとあひる』(*Angus and the Ducks*, 1930)、英語教育のテキストに多大な影響を与えた『キャット・イン・ザ・ハット』(*The Cat in the Hat*, 1957)で知られるドクター・スース(Theodor S. Geisel, 1904-91)の『ふしぎな500のぼうし』(*The 500 Hats of Bartholomew Cubbins*, 1938)などがある。

第二次世界大戦後のアメリカは経済的には安定し、都市人口の増加や大量生産から大衆による消費が盛んとなった。だが、1949年に制定された北大西洋条約機構によりソ連とは対立関係にあり、1950年代には朝鮮戦争が勃発する。この影響で反共主義に基づく「レッドパージ」と呼ばれる思想統制により、共産主義の一掃が促進された。このような時代を背景に、教育はリアリズムと事実説明主義に集中するが、その一方で、ピューリタニズムに排除されてきたファンタジーに目が向けられるようになる。コブタのウィルバーとクモのシャーロットとの「命がけの友情」を描くE・B・ホワイト(Elwyn Brooks White, 1899-1985)の『シャーロットのおくりもの』(*Charlotte's Web*, 1952)は、『オズ』以来「ファンタジー不毛の地」とみなされていたアメリカで、ようやく登場した名作である。

## ハイファンタジーと「夢」

イギリスでは、1950年、「ファンタジー第2黄金期」到来の契機となる、C・S・ルイス(Clive Staples Lewis, 1898-1963)作〈ナルニア国ものがたり〉第1巻『ライオンと魔女』(*The Lion, the Witch and the Wardrobe*)が出版された。主人公のルーシー・ペヴェンシーが最初にナルニアへ行く場面で、ごく普通の衣装ダンスから別世界へ至るのは、ルイスが愛読したネズビットのエヴリデイマジック作品の影響による。全7巻の〈ナルニア〉は、子どもにも分かるキリスト教の本として書かれた。

じつは、ルイスが〈ナルニア〉を創り出す上で強い影響を受けたのが、オックスフォード大学の

同僚だったトールキンである。ルイスには、『指輪物語』を草稿時から読む機会があった。トールキンは、イギリス人のための神話として生み出した作品の舞台となる「中つ国」(Middle-earth)と呼ばれる別世界を、「第二世界」として考えていた。「第二世界」とは、1939年の講演「妖精物語について」(*On Fairy-Stories*)でトールキンが用いた語である。唯一絶対の創造主(神)が創り出した「第一世界」に対して、「第二世界」とは優れた物語作者(人間)が創り出すものである。トールキンは、このような世界を創り出すことができる物語作者は、創造主(Creator)に次ぐ者すなわち「準創造者」(sub-creator)であるとしている。中つ国もナルニア(Narnia)も、このような考えに基づいて創られた別世界で物語が展開されることから、両者の作品は「ハイファンタジー」と呼ばれるジャンルに分類される。ハイファンタジーが提示する別世界は、現実世界とは異なる独自の歴史・地理・文化・言語等を有する。

トールキンが創り出した「ホビット」(トールキンの造語)という種族は、普通の「小さな人々」(身体の大きさのみならず、聖書の「小さな人々」も示唆)を指す。自身の戦争体験から、普通の人々が有事の際には普段では考えられないような状況を乗り切ることを知ったトールキンは、冥王が全てを支配するために造った唯一最強の指輪を滅ぼすことを目的とする旅を描く壮大な叙事詩的物語の主役に、「小さな」ホビットを選んだのである。

1950年代にイギリスで生まれたファンタジーの名作は、「第二世界」を舞台にくり広げられる大長編だけではない。「夢」と関連のある優れた作品も誕生した。フィリパ・ピアス(Philippa Pearce, 1920-2006)の『トムは真夜中の庭で』(*Tom's Midnight Garden*, 1958)は、少年主人公トム・リドルが休暇中あずけられた叔父夫婦が住むアパートで、真夜中にだけ現れる過去の庭を訪れるという、タイムファンタジーであると同時に、「夢」の不思議さを描くファンタジーでもある。ピアスはこの作品でカーネギー賞(1936年に制定されたイギリスの児童文学賞)を受賞した。また、『トム』と同年に出版されたキャサリン・ストー(Catherine Storr, 1913-2001)の『マリアンヌの夢』(*Marianne Dreams*)も、上記作品と同様、病床の少女マリアンヌの描画が具現化する「夢」が中心になっているが、こちらは、精神分析医でもあった作者の知識が活かされた「心理ファンタジー」である。

## 現代的孩子も像およびヤングアダルト作品の出現

1930年代に次ぐ絵本の黄金時代を迎えた1960年代のアメリカに登場したモーリス・センダック(Maurice Bernard Sendak, 1928-2012)の『かいじゅうたちのいるところ』(*Where the Wild Things Are*, 1963)は、現代的な子ども像を提示した。この絵本は、ある日悪戯が過ぎて部屋で反省するよう言われた男の子マックスが、そのまま怪獣たちがいる別世界へ旅をするという心の物語を描く。帰って来たマックスを待っているのは、まだ温かい夕食である。たとえ幼い子どもであっても、現実世界での悪戯では飽き足らず、別世界で怪獣と共に大騒ぎをして解消せずにはいられないほどの負の感情が内面にある可能性が示唆されている。子ども時代とは決して楽しいだけではなく、怒りも悲しみも苦しみも体験せざるを得ないという現代的子ども像が、初めて子どもの本の中で描かれるようになったのが、1960年代であった。

『おぼけ桃の冒険』(*James and the Giant Peach*, 1961)や『チョコレート工場の秘密』(*Charlie and the Chocolate Factory*, 1964)といった破天荒な作風で知られるイギリス人作家ロアルド・ダール(Roald Dahl, 1916-90)の「ライトファンタジー」における、大逆転による弱者の強者に対する勝利という「<sup>ハッピーエンディング</sup>幸福な結末」は、フェアリーテイルズを踏襲した筋書だが、その背景には現代的子ども像への意識がある。

アメリカの作家E・L・カニグズバーグ(Elaine Lobl Konigsburg, 1930-2013)のニューベリー賞受賞作品『クローディアの秘密』(*From the Mixed-Up Files of Mrs. Basil E. Frankweiler*, 1967)は、優等生で家庭内でもよい子の少女主人公クローディアが、弟と共に家出をする物語である。メトロポリタン美術館という家出先もユニークだが、一見問題などなさそうな子どもにも自分探しの時期が訪れることを示唆した傑作である。結局、「秘密」を分かち合う相手となる老婦人ミセス・フランクワイラーとの出会いにより、主人公は満足して無事に帰宅する。

先の大戦の影響は、この時代の児童文学作品にも見られる。もと政治家だったイギリスのリチャード・アダムズ(Richard Adams, 1920-2016)作『ウォーターシップダウンのうさぎたち』(*Watership Down*, 1972)は、ウサギを主人公とした「動物ファンタジー」を通して、理想の指導者に率いられる「理想の共同体とは何か」という主題を追究した。この作品に描かれるユートピアとしてのウォーターシップダウンとは対照的な、ディストピアとしてのウサギの帝国エフラファは、ヒットラーの第三帝国を指していると言われる。

アメリカのSFおよびファンタジー作家アーシュラ・K・ル=グウィン(Ursula K. Le Guin, 1929-2018)の「ゲド戦記」シリーズ第1巻『影との戦い』(*A Wizard of Earthsea*, 1968)では、「アースシー」(Earthsea)という架空世界を舞台に、魔法使いとして天才的な素質をもつ主人公ゲド(通称「ハイタカ」)が、ローク島の魔法学校で学ぼうちに傲慢さから影を解き放ち、その影と対峙するために旅に出るが、最終的には、自分自身を探し求めるための旅をしていたことが明らかとなる。

主人公の成長を描くル=グウィンの『影との戦い』は、「ヤングアダルト」というジャンルを意識して書かれた。「ヤングアダルト」(young adult)とは10代後半の青少年を指す言葉だが、出版業界用語としては、いわゆる問題小説が登場する1950年代から1960年代にかけて、大人と子どもの狭間に位置する思春期の読者を対象とした作品群のために、アメリカで新たに考案されたジャンルであり、YAとも略される。「ヤングアダルトの旗手」と言われるアメリカ人作家ロバート・コーミエ(Robert Cormier, 1925-2000)の『チョコレート・ウォー』(*The Chocolate War*, 1974)は、カトリック系の男子進学校という閉鎖的な空間を舞台に、暴力性と徹底したリアリズムとから激しい論議的となった作品であり、主人公が徹底的に叩きのめされる結末に対しては賛否両論があった。

また、この時代、死という問題を児童文学作品で描き話題となったのが、アメリカの作家キャサリン・パターソン(Katherine Paterson, 1932-)の『テラビシアにかけの橋』(*Bridge to Terabithia*, 1977)である。少年主人公ジェシーが転校生の少女レスリーと共につくった空想の国「テラビシア」(<ナルニア国ものがたり>に由来する名称)で親友と共有する世界を得るが、突然のレスリーの事故死により受ける衝撃と悲しみを、乗り越えていく物語である。

さらに、現実には子どもに影響を与えずにはおかない家庭内の問題が、子どもの本の中でも描かれるようになる。イギリスの作家ロバート・ウェストール(Robert Atkinson Westall, 1929-93)の二



度目のカーネギー賞受賞作『かかし』(*The Scarecrows*, 1981)は、二度目の父親を受け入れられない少年サイモンの苦悩と葛藤が、3体のかかしとの対峙を通して浄化されるまでが描かれ、現実を描くために超自然が用いられている新しさから「現実のファンタジー」と呼ばれる。『かかし』の主人公は実父と死別しているが、イギリスのアン・ファイン(Anne Fine, 1947-)は、代表作『ぎょろ目のジェラルド』(*Google-Eyes*, 1989)や映画化もされた『ミセス・ダウト』(*Madame Doubtfire*, 1987)などの作品において、家庭内不和や両親の離婚といった問題を描いた。

ニュージーランドの作家マーガレット・マーヒー(Margaret Mahy, 1936- 2012)は、魔法使いや魔女を扱った『足音がやってくる』(*The Haunting*, 1982)と『めざめれば魔女』(*The Changeover*, 1984)という2つの作品で、二度のカーネギー賞を受賞している。特に『足音がやってくる』はマーヒーにとって初めての長編であり、特殊な力をもつ者が生まれる一族を通して、家族が子どもの生来の才能をつぶす可能性をもつことを示唆する。また、『めざめれば魔女』は邪悪な力を持つ者に蝕まれていく幼い弟を救おうと、少女主人公ローラが生来の魔女としての才能を開花させる様を、思春期に訪れる変容と重ねて描く。

1960年代以降の絵本には、オフセット印刷やカラー分解技術等さらに向上した印刷技術により、色鮮やかな作品が登場する。「色彩の魔術師」と呼ばれるイギリスの絵本作家ブライアン・ワイルドスミス(Brian Wildsmith, 1930-2016)の『ワイルドスミスのABC』(*Brian Wildsmith's ABC*, 1962)はその好例である。

また、この時代には、新しい構造をもつ絵本も登場する。例えば、先述のセンダック作品でも、絵と文が同一内容でお互いを説明し合うことは必ずしもなく、文がまったく入らない見開き2ページ大の絵だけで成り立つ箇所も見られる。同様に、イギリスのジョン・バーニンガム(John Burningham, 1936-)の絵本『なみにきをつけて、シャーリー』(*Come Away from the Water, Shirley*, 1977)は、左ページでは現実世界の浜辺で寛ぐ大人の絵と両親が娘に与える注意を文として示し、右ページでは絵だけでシャーリーという女の子の空想世界を示す。大人達の様子が薄いぼんやりとした色彩で描かれるのに対し、子どもの心の中の冒険物語は色鮮やかである。

また、イギリスのレイモンド・ブリッグズ(Raymond Briggs, 1934-)の『さむがりやのサンタ』(*Father Christmas*, 1973)や『スノーマン』(*The Snowman*, 1978)は、コミックのコマ割りという新しい技法を採り入れた絵本である。他にも、素朴な老夫婦を通して核兵器の恐ろしさを訴え、図書館や学校で戦争と平和を考える際に取り上げられることが多い『風がふくとき』(*When the Wind Blows*, 1982)も、ブリッグズの作品である。家庭内の問題やジェンダーの問題を扱う絵本作家アンソニー・ブラウン(Anthony Browne, 1946-)の『すきです、ゴリラ』(*Gorilla*, 1983)に登場する父親は、父子家庭であるにもかかわらず、仕事三昧で1人娘のハナをかまおうとしない。だが、ある夜ゴリラの人形が巨大化し、まるで父親のようにハナと遊んでくれる。最後に示されるのは幸福な結末である。

## 1990年代以降の児童文学

社会や家庭内の問題を明白に描くようになった先述の作品と同様、バーリー・ドハーティ(Berlie

Doherty, 1943-)の『ディア ノーバディ』(*Dear Nobody*, 1991)は、大学進学を控えた高校生の妊娠という、それまで見られなかった主題を扱った。タイトルの「誰でもないあなたへ」とは、じつは少女主人公ヘレンが、まだ見ぬ我が子に宛てた手紙の書き出しである。一人旅で気持ちを整理した後に初めて父親になる決意をする少年主人公クリスとは異なり、終始ヘレンは母親であったことを描き、ジェンダーの問題をも明示した作品である。

1995 年に出版された『黄金の羅針盤』(*Northern Lights*, 1995)に始まるイギリスの作家フィリップ・プルマン(Philip Pullman, 1946-)の「ライラの冒険」三部作(*His Dark Materials*, 1995-2000)は、ジョン・ミルトン(John Milton, 1608-74)の叙事詩『失樂園』(*Paradise Lost*, 1667)のモチーフを採り入れた壮大なスケールのファンタジーであり、パラレルワールドを舞台に展開される。

また、子どもの本離れが問題視されていた頃、子ども達を再び読書へと誘うファンタジー作品が登場する。イギリスのJ・K・ローリング(Joanne Kathleen Rowling, 1965-)作「ハリーポッター」シリーズである。第1巻『ハリー・ポッターと賢者の石』(*Harry Potter and the Philosopher's Stone*, 1997)出版以降、当時最新のゲームソフトの発売日に玩具店に列をなしていた子ども達が、「ハリーポッター」の最新刊の発売日に書店に列をなすようになるという社会現象をも引き起こした。2007年出版の『ハリー・ポッターと死の秘宝』(*Harry Potter and the Deathly Hallows*)まで7冊が刊行された。

「ライラ」と「ハリーポッター」は、大人が子どもの本を好んで読むという「クロスオーバー現象」を引き起こした作品でもある。両者とも決して難易度が低くない内容であるにもかかわらず、多様な年齢層の読者に受け入れられ、本を読む者と読まない者との差異をも縮めたのである。

## おわりに

以上、「アリス」から「ハリーポッター」までの 150 年間に焦点を当て、英米児童文学史を概観した。先述のとおり、子どもという存在を認識することから誕生した児童文学作品は、一般読者を対象とする文学作品の歴史と並行して、独自の発達や変遷を遂げてきた。英米児童文学史を学ぶことは、外国語の学習指導要領(平成 29 年3月告示)にも明記されている、英語の「背景にある文化」や社会、世界、他者との関わりについて学ぶことにつながる。また、作品が対象とする子どもの年齢は多様であり、「生徒にとって身近な学校生活や家庭生活」に触れている作品も少なくない。英語で書かれた児童文学作品に関する知識を得ることは、小中高それぞれのレベルで、「十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現」を用いて読むことができる英文の好例を知る一助ともなろう。尚、既に 21 世紀に入って 17 年が経過していることから、「ハリーポッター」以降のさらに新しい作家・作品についても述べる必要があり、今後の課題としたい。

### 参考書リスト

Hunt, Peter, ed. *Children's Literature: An Illustrated History*. Oxford: OUP, 1995. (『子どもの本の歴史』さくまゆみこ・福本友美子・こだまともこ訳 柏書房、2001 年)

桂宥子編著『はじめて学ぶ英米絵本史』ミネルヴァ書房、2011 年。

桂宥子・牟田おりえ編著『はじめて学ぶ英米児童文学史』ミネルヴァ書房、2004 年。